

大学生による市販絵本を活用した小学校家庭科「家族」の授業づくり

Class Making of Elementary School Home Economics "family" Using Commercial Picture Book by University Students

鈴木 千 春* 永 田 智 子**

SUZUKI Chiharu NAGATA Tomoko

本稿は小学校家庭科の「家族」の授業に、調査用絵本『おんぶはこりごり』が、どのように活用できるかを、大学生に調査したものである。大学生が考案した授業を分析した結果、「Ⅰ絵本の中の家族」を扱った項目が7つ、「Ⅱ自分の家族」を扱った項目が4つあり、その組み合わせから、8組54タイプの授業に分類できた。学習内容は明確に示されているものが多かったが、学習活動においてはその方法が曖昧であることが分かった。そのため、書いたり考えたりする学習活動の具体的な方法を提案することが課題となった。大学生の記述では、全体の55.7%が絵本を活用した授業を考えることができていた。一方で、絵本活用は「感想」のみ(26.3%)や、「読む」だけ(14.7%)にとどまっていることも分かった。また、「Ⅱ自分の家族」について「@家族の一員として」の在り方を授業に盛り込みたいとする学生が多いことが分かった(66.7%)。この点は小学校家庭科の目標を理解しているものと捉えることができる。しかし授業の大半を「Ⅱ自分の家族」に注目して行うことになるため、プライバシーの保護の観点などから、絵本活用の利点や有効性について、また、共通の家族で授業を行う方法について提案する必要があることが分かった。

キーワード：絵本活用, 小学校, 家庭科, 家族, 授業づくり

1. 研究の背景と目的

今次の学習指導要領の改訂に伴い、これまでの小学校家庭科「A 家庭生活と家族」の学習は「A 家族・家庭生活」と、内容名が変わった。その内容を示す学習項目は「自分の成長と家族」が「自分の成長と家族・家庭生活」に、「家庭生活と仕事」は変わらず、「家族や近隣の人々とのかわり」は「家族や地域の人々との関わり」の3つからなり、大きな変更は見られない(文部科学省 2017)。

家族や家庭生活を取り上げた授業は、様々に行われ蓄積されてきた(伊深 2016)が、同時に指導の困難さも指摘されている。中でも、児童のプライバシーに触れる点や、「実習」を伴う学習に比べると児童の意欲が低下する点、教師もまた、「実習」のようなこれといった、具体的な授業方法が見出せないなどの指摘がある(鳥井 1998, 鈴木 2004, 片田江 2010)。これらの指摘に対応した教材の開発が急務であることから、鈴木・永田(2018)は、家族や家庭生活を描いた市販絵本に着目し、学習内容を含んだ9冊の市販絵本を選定した。さらに授業者側(教員養成課程に属する大学生)と学習者側(6年生児童)に選定した絵本の読み取り調査を行い、両者の間で、読み取りが一致した授業実践に活用可能であろう絵本を示すと共に、市販絵本の選定のポイントを明らかにした。しかし、どのように授業で活用できるのか、選定した市販絵本の評価については課題が残った。

以上を踏まえ、本研究では、鈴木・永田(2018)によって示された市販絵本を活用し、授業実践を通して評価するための前段階として、授業の中でどのように活用でき


るのかについて、大学生が考える授業づくりを調査することを目的とする。

2. 研究の方法

本研究では、鈴木・永田(2018)が選定した2冊の市販絵本の内、『おんぶはこりごり』(アンソニー・ブラウン: 作絵・藤本朝巳: 訳 2005)を調査用の絵本として使用する(表1)。なお、本研究を進めるにあたっては、『おんぶはこりごり』の使用目的、使用方法について出版社の承諾を得て行った。

調査用絵本『おんぶはこりごり』の登場人物は、パパと2人の息子とママである。仕事と家事を忙しくこなし続けるママとは反対に、パパと2人の息子は、大きな声でご飯を催促したり、だらしなくソファに座って時間をつぶしたりたりと、何もしようとしない。家庭の仕事は全てママに任せている状態である。ある日、ママは「ぶたさんたちの おせわは もう こりごり!」と言う置手紙をして家出をした。家の中は汚れたお皿や服がたまり、ごみが散乱して豚小屋ようになった。そしてとうとう食べるものもなくなったある晩、ママは帰ってきた。何もしよとしなかったパパと2人の息子は、掃除、食事、アイロンがけなど、家事の大変さに気づき、家庭の仕事を分担し合うようになる。そしてママは幸せを感じるようになった。この絵本に描かれている内容は、小学校家庭科の内容(文部科学省 2008)であるところの「自分の成長を自覚することを通して、家庭生活と家族の大切さに気付くこと」「家庭には自分や家族の生活を支え

表1 『おんぶはこりごり』 基本情報と学習内容

題名 『おんぶはこりごり』	平凡社, 2005 年	<小学校家庭科の内容> 「自分の成長を自覚することを通して、家庭生活と家族の大切さに気付くこと」「家庭には自分や家族の生活を支える仕事があることが分かり、自分の分担する仕事ができること」
表紙絵 	アンソニー・ブラウン：作絵 藤本朝巳：訳	<あらすじ> 仕事と家事を忙しくこなし続けたママが、ある日家出をすることによって、何もしようとしなかったパパと2人の息子が、掃除、食事、アイロンがけなど、家事の大変さに気づき、家庭の仕事を分担し合うようになる。

る仕事があることが分かり、自分の分担する仕事ができること」に該当することが、鈴木・永田（2018）によって明らかにされている。

授業者側は小学校家庭科の目的や内容を履修した教員養成課程に属する大学生95名である。大学生には大型スクリーンに絵本を映して読み聞かせを行い、あらすじと含まれている学習内容を確認できるようにした。絵本とワークシートを配布し、6年生を想定した授業の展開を考えるよう指示をした。授業の中で絵本を活用する場合は、場面や方法がわかるように記述することを口頭で伝えた。調査は2017年12月に実施した。

分析は、大学生が記述した学習内容を「Ⅰ絵本の中の家族」を扱う項目と、「Ⅱ自分の家族」を扱う項目とに分類し、その件数を示した。また、学習活動を示す項目との組み合わせから類型を作り、その件数も示した。

3. 結果と考察

3.1 学習内容に関する記述「絵本の中の家族」

6年生の家族の学習に調査用絵本を活用する場合に、どのような場面や内容を授業に盛り込むか、つまり学習内容について、大学生の記述内容から分類した。分類結果は表2の大学生の学習内容として示した。

「①絵本全体の内容について」、まずは児童が自分で読んだり、教師が読み聞かせをしたりする学習活動があった。その他を省く全ての大学生（100.0%）が記述していた。「②感想について」は、①を受けてどのような絵本であるかを確認する意味も含め、感想を発表したり書いたり、また、話し合ったりする学習活動の記述があった。「③登場人物の行動や気持ちの違いについて」では、まとめたり発表したりする学習活動が見られた。②をより具体的な場面に絞って考えさせることができる記述内容であった。「④パパと息子の日常の行動、パパと息子の行動の変化について」は、絵本のどの場面に特に焦点を当てて授業を展開するのにかかってくる記述であり、登場人物のパパと息子に着目した記述内容である。パパと息子の行動を取り上げ、考えて書いたり、

討論したり、発表したりする学習活動が見られた。「⑤ママの日常の行動、ママの家出、ママの気持ちの変化について」は、④と同様に登場人物であるママに着目して、ママの立場から家族を見る記述である。ママの行動や気持ちを考えて書いたり、討論したり発表したりする学習活動であった。「⑥家庭やママの仕事が分かる場面について」は、絵本に描かれている家庭やママの仕事を発表することで、学習内容の「家庭には自分や家族の生活を支える仕事がある」ことを認識できるとした記述内容であった。「⑦絵本の中の家族の一員になった場合について」では、これまでの学習を踏まえ、自分ならどうするかと言った問いに向かって、考えたり書いたり、また、発表したりする学習活動であった。

④～⑥の記述内容は、特に大学生が小学校家庭科の学習内容である、「自分の成長を自覚することを通して、家庭生活と家族の大切さに気付くこと」「家庭には自分や家族の生活を支える仕事があることが分かり、自分の分担する仕事ができること」を踏まえたうえで、絵本を活用しようとする記述内容であったことが分かった。

さらに、⑦については、小学校家庭科の目標である「(3) 家庭生活を大切にすることを育み、家族や地域の人々との関わりを考え、家族の一員として、生活をよりよくしようと工夫する実践的な態度を養う」(文部科学省2017) ことをも踏まえて、学習を進めようと考えられていることが分かった。

また、家族を学ぶにあたり、絵本の中の家族をベースに授業を展開することは、プライバシーの保護の観点からも有効である。そのため、⑦は絵本を活用する最大のポイントとして配慮した記述内容であると言える。これら④～⑦の記述内容を授業に盛り込み、家族についての学習を展開しようとする学生の記述に、調査用絵本を活用する一定の成果があるものと考ええる。

一方で、学習活動の記述には、どのように書かせたり、考えさせたりするのかについて、具体的に示した記述はほとんど見当たらなかった。そのため授業実践では、授業の進め方や活動のさせ方に曖昧さが生じる可能性がある

る。つまり、児童が回答する方法を迷うことにつながるのではないかと考えられる。

以上、学生の記述から学習活動については課題が残るものの、絵本を活用する場合の学習内容として、上記の①～⑦を「Ⅰ絵本の中の家族」を扱った項目とした。

3.2 学習内容に関する記述「自分の家族」

学生の記述内容は、「Ⅰ絵本の中の家族」を取り上げて授業をつくる場合と、児童自身の家族を示す「Ⅱ自分の家族」を取り上げて授業をつくる場合に分かれることが分かった。ここでは表2の絵本を活用せずに、「Ⅱ自分の家族」について授業を行う場合の記述の分析結果を述べる。

「⑧家族の仕事や役割について」では、一般的に家庭にはどのような仕事があり、それがどのような役割をしているのかを自分の家族を思い出しながら考える記述内容である。「⑨自分や家族が行っている仕事や行動について」は、自分の家族の中で、誰がどのような仕事をしているのか、また、していないのかを発表すると共に、家庭で自分はどのように過ごしているのか、仕事に協力ができているのかなどの行動について、発表する学習活動があった。「⑩家族の一員として自分にできること、改善できること、分担できることについて」は、直接自分の家族を取り上げ、個々に違う課題について考えを書いたり発表したりする記述が見られた。⑨及び⑩において、特に発表するとした記述については、児童の家庭の状況を暴露させる場面につながる恐れがあると考えられる。「⑩家庭での実践について」は、授業の終わりに家庭での実践を教師が促し、自分が何をするのかを確認させる内容が記述されていた。また、家庭での実践を次時までの宿題とする内容も含まれている。

⑧～⑩の記述内容は、④～⑥と同様に、学生が小学校家庭科の学習内容を踏まえていることがわかった。さらに、⑦と同様に小学校家庭科の目標をも踏まえて、授業を展開しようと考えられていることが分かった。しかし、ここでは、絵本を活用せずに自分の家庭を教材としているため、プライバシーの保護が困難であることが懸念される。また、個々に違う家庭では、課題も様々であることから、他者の意見や自分の意見が、互いに反映されるとは言い難い。

学習活動の記述では、3.1でも述べたように、どのように書かせたり、考えさせたりするのかについて、具体的に示した記述はほとんど見当たらなかった。そのため授業実践時には、児童が迷わず活動できる方法を具体的に示す必要があると考える。

以上、大学生の記述から学習活動については課題が残るものの、絵本を活用しない内容として、上記の⑧～⑩を「Ⅱ自分の家族」を扱った項目とした。

3.3 学習内容と学習方法の組み合わせによる類型化

大学生の記述を学習内容と学習方法の組み合わせから、絵本を活用した授業づくりを類型化し分析した。な

お、その他を省く全ての大学生が、「①絵本全体の内容について」読んだり読み聞かせをしたりするために絵本を活用すると記述していたことから、①は活用の前提として①以外の活用を中心に枠組みを検討した。類型の結果は表2の類型欄に、組み合わせの結果は○印によって示した。

A組1～4は、「④パパと息子の日常の行動、パパと息子の行動の変化について」絵本を活用するタイプである。4人が記述した(4.2%)。組み合わせとしては、Ⅱ自分の家族に目を向けて主に⑨について学習をするが3件あった。⑪の家庭での実践についても組み合わせていた。A組は、絵本の中のパパや息子の日常の様子を読み取ることによって、現在の自分や家族の在り方を想起しやすいのではないかと考えられる。

B組5～14は、「⑤ママの日常の行動、ママの外出、ママの気持ちの変化について」絵本を活用するタイプである。18人が記述した(18.9%)。組み合わせとしては、Ⅱ自分の家族に目を向けて⑨や⑩を学習するタイプが15件あった。A組と同様に⑪の家庭での実践についても組み合わせていた。B組は、絵本の中のママの行動や気持ちを主に学習することになる。忙しく家族のために働くママの描写を読み取ると、現在の自分や家族の在り方と比べやすいためではないかと考える。また、ママの様子や気持ちに気付くと、家族の一員として現在の生活を改善できる⑩の学習にも結び付けやすいと考えたのではないかと推測した。

C組15～17は、④と⑤の両方を授業に盛り込むタイプである。4人が記述した(4.2%)。組み合わせは、家庭の仕事を全てこなすママと、任せきりにしているパパと息子の行動や気持ちについて時間をかけて学習した後、Ⅱ自分の家族に目を向け、改善すべき点や家族の一員としての有り方など⑩について学習するタイプが3件あった。内1件は、⑪の家庭での実践に触れる記述があった。C組は、登場人物の全ての立場から学習することになるため、他の組み合わせは時間的にも難しい。しかし、学んだことを実践につなげるため、自分の家族に置き換えて考えさせる⑩を組み合わせたものと考えられる。

D組18～24は、「⑥家庭やママの仕事が分かる場面について」絵本を活用するタイプである。7人が記述した(7.4%)。組み合わせは、Ⅱ自分の家族に焦点をあてて、仕事や役割について学習する⑧と、現在行っている仕事や行動について学習する⑨、さらには家族の一員として改善や分担など自分にできることについて扱う⑩のタイプがあった。内3件は、⑪の家庭での実践をも組み合わせていた。D組は、家庭にはどのような仕事があるのかを、絵本の描写から知ることができる点に注目している。それらの仕事を実際に誰がしているのか、また、していないのか、このままで良いのかと言ったことに触れることで、家族の一員としての自覚を促し、改善や分担について学習しようとする組み合わせになっていると考えられる。

表2 絵本活用に関する組み合わせ類型 (N = 95)

学習内容		Ⅰ 絵本の中の家族 (①～⑦ 絵本活用あり)							Ⅱ 自分の家族 (⑧～⑪ 絵本活用なし)					件数	合計 (%)
		①絵本全体の内容について。	②絵本の感想について。	③登場人物の行動や気持ちの違いについて。	④パパと息子の日常の行動、パパと息子の行動の変化について。	⑤ママの日常の行動、ママの外出、ママの気持ちの変化について。	⑥家庭やママの仕事が分かる場面について。	⑦絵本の中の家族の一員になった場合について。	⑧家庭の仕事や役割について。	⑨自分や家族が行っている仕事や行動について。	⑩家族の一員として自分にできることや改善できること、分担できることについて。	⑪家庭での実践について。			
学習活動 類型		読む。読み聞かせ。	発表する。書く。話し合う。	まとめる。発表する。	考える。書く。討論する。発表する。	考える。書く。討論する。発表する。	発表する。	(自分ならどうするか)考える。書く。発表する。	考える。	発表する。	考える。書く。発表する。	確認する。仕事を宿題にする。			
A	1	○			○							○	1	4 (4.2%)	
	2	○			○					○	○		1		
	3	○			○					○		○	1		
	4	○		○	○					○			1		
B	5	○				○							3	18 (18.9%)	
	6	○				○				○			1		
	7	○				○					○		6		
	8	○				○					○	○	1		
	9	○				○		○			○	○	1		
	10	○	○			○				○	○		2		
	11	○				○				○		○	1		
	12	○				○			○	○			1		
	13	○	○	○		○					○	○	1		
	14	○		○		○					○		1		
C	15	○			○	○							1	4 (4.2%)	
	16	○			○	○					○		2		
	17	○			○	○					○	○	1		
D	18	○					○			○	○	○	1	7 (7.4%)	
	19	○					○	○			○		1		
	20	○					○		○		○		1		
	21	○					○		○		○	○	1		
	22	○					○		○	○	○	○	1		
	23	○		○			○		○				1		
	24	○		○	○		○			○	○		1		
E	25	○	○					○					2	8 (8.4%)	
	26	○	○					○			○		1		
	27	○	○					○		○			1		
	28	○						○		○	○		1		
	29	○		○				○		○			3		

F	30	○	○	○									1	12 (12.6%)
	31	○	○	○							○		2	
	32	○	○	○					○	○	○	○	1	
	33	○		○							○		1	
	34	○		○					○		○	○	1	
	35	○		○						○	○	○	2	
	36	○		○							○		2	
	37	○		○							○	○	2	
G	38	○	○										4	25 (26.3%)
	39	○	○							○			3	
	40	○	○							○	○		5	
	41	○	○								○		3	
	42	○	○								○	○	1	
	43	○	○						○				1	
	44	○	○						○	○	○		3	
	45	○	○						○			○	1	
	46	○	○						○	○	○	○	2	
	47	○	○							○	○	○	2	
H	48	○							○		○	○	1	14 (14.7%)
	49	○							○			○	1	
	50	○									○		2	
	51	○							○		○		2	
	52	○								○	○		4	
	53	○							○	○	○		3	
	54	○							○	○	○	○	1	
その他												3	3.2	
件数	54	28	14	8	13	7	7	16	23	36	21			
割合 (%)	100.0	51.9	25.9	14.8	24.1	13.0	13.0	29.6	42.6	66.7	38.9			

E組 25～29 は、「⑦絵本の中の家族の一員になった場合について」自分ならどうするのかを絵本全体を使って授業を行うタイプである。8人が記述した（8.4%）。組み合わせとしては、Ⅱ自分の家族に目を向け、⑨や⑩を盛り込むタイプが6件あった。E組は、自分が絵本の中の家族の一員であると設定するため、実際の家族の一員として考えるプレとして、問題点を見つけたり、改善策を考えたりすることができる。また、学習者が授業の大半を共通の家族を通して学ぶことができる点において、プライバシーの保護が可能となり、絵本を活用する利点が活かされているものと考ええる。

F組 30～37 は「②感想について」を含めて、「③登場人物の行動や気持ちの違いについて」絵本を活用するタイプである。12人が記述した（12.6%）。組み合わせ

は、Ⅱ自分の家族に注目し、家族の一員としてどのように取り組むべきかについて学習する⑩が11件で多かった。また、実践につなげていく⑪の組み合わせも6件あった。F組は、絵本の場面を限定せずに登場人物の特性から、絵本全体の印象を問うために絵本を活用している。家族についての学習は、Ⅱ自分の家族の⑩の中で具体的に学習するように考えられていた。

G組 38～47 は、「①絵本全体の内容について」読んだり読み聞かせをしたりした後、「②感想について」発表したり書いたり、また、話し合ったりするのみに絵本を活用するタイプである。25人が記述した（26.3%）。組み合わせは、⑧～⑩のいずれか又は複数を盛り込むタイプが21件あった。内6件は⑪も組み合わせていた。G組は、登場人物や場面などを限定せずに、自由な感想

のみに絵本を活用しているため、授業のメインはⅡ自分の家族に向けられていることが分かった。そのため、授業の大半は個々に自分の家庭と向き合うこととなる。G組には、絵本がどのように活用できるのかについて、複数の方法があることを示す必要がある。

H組48～54は、「①絵本全体の内容について」読んだり読み聞かせをしたりするのに絵本を活用するタイプである。14人が記述した(14.7%)。組み合わせは、Ⅱ自分の家族の⑧～⑩のいずれか又は、複数を盛り込むタイプが全てであった。H組は、絵本活用が「読む」のみであるため、Ⅱ自分の家族に注目した授業がメインになっている。個々に現状が違う家族を一齐授業で取り上げることは、相手の意見が自分の家族の状況に、自分の意見が相手の家族の状況に、反映されにくいことが考えられる。また、プライバシーの保護の観点からも、Ⅰ絵本の中の家族を取り扱う利点について、改めて教授する必要があると考える。

以上のように、類型はA～H組の8組があり、項目の組み合わせにより54タイプの授業に分類することができた。A～H組の中で、全体の55.7%にあたるA～F組は、絵本を活用した授業を考えることができていた。一方で、G組は絵本活用が「感想について」(26.3%)のみであることから、他の方法もあることを促す必要があることが分かった。さらに、H組に関しては、絵本を「読む」ことのみに利用する記述である(14.7%)。よって、絵本活用の利点や有効性について教材研究のポイントを示し教授する必要がある。

次に54タイプの組み合わせの件数について見ると、「Ⅰ絵本の中の家族」の中では、①が上述の通り、54タイプ(100.0%)全てに記述があった。次に②が28タイプ(51.9%)、③が14タイプ(25.9%)、⑤が13タイプ(24.1%)で多かった。「Ⅱ自分の家族」の中では、⑩が36タイプ(66.7%)で多かった。次に⑨が23タイプ(42.6%)、⑪が21タイプ(38.9%)と多く、⑧も16タイプ(29.6%)あり、授業の中では、自分の家族に目を向けて学習したいと考える学生が多いことが分かった。

4. まとめと課題

本研究は、市販絵本を活用した小学校家庭科の家族の授業を検討することを目的に、鈴木・永田(2018)が選定した調査用絵本『おんぶはこりごり』を、教員養成課程に属する大学生に、授業の中でどのように活用するかについて、調査したものである。

まず、大学生の記述を分析したところ、3.1では、絵本を活用して、「①絵本全体の内容について」、「②絵本の感想について」、「③登場人物の行動や気持ちの違いについて」、「④パパと息子の日常の行動、パパと息子の行動の変化について」、「⑤ママの日常の行動、ママの家出、ママの気持ちの変化について」、「⑥家庭やママの仕事が分かる場面について」、「⑦絵本の中の家族の一員になった場合について」の7項目の学習内容が明らかになった。これを「Ⅰ絵本の中の家族」を扱った項目として分類で

きた。大学生の記述からは、絵本を活用する学習内容は明確に分かるものが多かった。さらに3.2では、大学生の記述には、絵本を活用しない「Ⅱ自分の家族」を扱った項目、「⑧家庭の仕事や役割について」、「⑨自分や家族が行っている仕事や行動について」、「⑩家族の一員として自分にできることや改善できること、分担できることについて」、「⑪家庭での実践について」の4つに分類できた。これらの記述も、学習内容は明確に示されているものが多かった。しかし、3.1と3.2共に、書かせたり考えさせたりする学習活動においては、具体的な方法が示されていなかった。そのため実際に授業を行う場合には、授業の進め方や活動のさせ方に曖昧さが生じる可能性がある。つまり、児童が回答の仕方に迷うであろうことが分かった。

3.3では、絵本を活用した主となる学習内容と学習活動の組み合わせから授業を類型化した。その結果、A～Hの8組54タイプの授業が考案されたことが明らかになった。8組中6組にあたる55.7%が絵本を活用した授業を考えることができていた。一方で、絵本活用が「感想について」のみ利用するとした授業や、「読む」だけの授業にとどまっていることも分かった。組み合わせのタイプでは、「Ⅱ自分の家族」について「⑩家族の一員として自分にできることや改善できること、分担できることについて」の授業を盛り込みたいとする大学生が多いことが分かった。この点については、小学校家庭科の目標を理解しているものと捉えることができる。しかし、授業の大半を個々の家族に焦点を当て発表する学習は、意見が相互に反映できない可能性がある。また、プライバシーの保護の観点からも課題が残った。

以上、調査用絵本を授業で活用する場合は、本研究では児童が迷わず書いたり考えたりすることができるような具体的な学習活動を見出すことはできなかった。この点については今後の課題とする。また、家族の一員としての在り方に関する学習をする場合に、児童自身の家族を取り上げたいとする授業が多かった。つまりプライバシーが保護できにくい授業が多かった。この点にも工夫が必要であるため、今後の課題とする。

参考文献

- アンソニー、ブラウン：作絵・藤本朝巳：訳(2005) おんぶはこりごり、平凡社。
- 伊深祥子(2016) 家庭科における家族の授業分析、日本家庭科教育学会誌、58(4):232-239。
- 片田江綾子(2010) 家族について考えるということ—家庭科教員の家族教育体験に関する現象学的研究—、日本家庭科教育学会誌、53(1):22-31。
- 文部科学省(2008) 小学校学習指導要領。
- 文部科学省(2017) 小学校学習指導要領。
- 鈴木千春、永田智子(2018) 小学校家庭科「家庭生活と家族」の学習に適した市販絵本の設定—大学生と小学生の読み取り調査をもとに—、日本教育メディア学会教育メディア研究、第24巻第2号、pp.1-12。

- 鈴木敏子（2004）「家族」をどうとらえたらいいの
うか，衣食住・家族の学びのリニューアル，日本家庭
科教育学会編，明治図書，東京，pp.54-59.
- 鳥井葉子（1998）家族・家庭生活に関する関心・意欲を
育てる授業，新しい時代の家庭科教育第1巻，ニチブ
ン，東京，pp.119-124.